

【原著】

## 世帯構成別にみた女性高齢者の生きがいに関する研究

弘原海 剛<sup>1)</sup>, 銅直 優子<sup>2)</sup>, 渡邊 完児<sup>3)</sup>, 渡辺 一志<sup>4)</sup>, 上田 照子<sup>5)</sup>

The *ikigai* of elderly women according to household composition

Tsuyoshi Wadazumi, Yuko Dobeta, Kanji Watanabe, Hitoshi Watanabe, Teruko Ueda

### Abstract

#### Purpose

The purpose of this study was to examine factors associated with *ikigai*, a Japanese term meaning “something making one’s life worth living”, according to household composition among Japanese women aged 65 years and older.

#### Method

The subjects were 365 healthy women (mean age, 70.5±5.7 years) participating in social clubs for women between 60 and 95 years old. They completed a self-administered survey containing items for demographic factors (age, household structure, etc.), quality of life (QOL), type A behavior pattern (Type A), a feeling measure of *ikigai* for elderly people (K-I type), and romantic feelings.

#### Results

The subjects were classified into 4 groups (A-1, A-2, B-1, B-2), as follows : A) Living with spouse : A-1 “Couple (husband and wife only)”, A-2 “Cohabitation (living together with other family members)”, B) No spouse: B-1 “Alone (living alone)”, B-2 “Cohabitation (living together with other family members)”.

1. For total *ikigai* score, A-1 scored significantly higher than B-2 ( $p<0.05$ ).
2. Four factors (“self-realization and will”, “life sense of fulfillment”, “will to live”, and “sense of existence”) constituting the total score for *ikigai* were compared among the groups. As for “will to live”, A-1 showed a significantly higher score ( $p<0.05$ ). Furthermore, A-1 had a significantly higher score for “sense of existence” as compared to B-1 ( $p<0.001$ ) and B-2 ( $p<0.01$ ).
3. To clarify factors affecting *ikigai*, the total scores were made into dependent variables and multiple regression analysis of the 4 groups was performed using age, hobbies, need for love, presence of a loved one, feelings of loneliness, Type A, QOL (physical health, environmental aspects) and economic situation as independent variables. The physical health factor of QOL had a significant effect on *ikigai* in all groups. In B-1, the environmental aspect of QOL had a significant effect, while need for love had a significant effect in B-2.

#### Conclusions

Among elderly Japanese women, factors affecting *ikigai* differed based on household com-

- 
- |  |  |
|--|--|
| <p>1) 関西大学 人間健康学部 人間健康学科<br/>〒590-0011 堺市堺区香ヶ丘町1-11-1</p> <p>2) 流通科学大学 サービス産業学部 サービス<br/>ビスマネジメント学科<br/>〒651-2188 神戸市西区学園西町3-1</p> <p>3) 武庫川女子大学 健康・スポーツ科学部<br/>健康・スポーツ科学科<br/>〒663-8558 兵庫県西宮市池開町6-46</p> <p>4) 大阪市立大学 都市健康・スポーツ研究<br/>センター<br/>〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138</p> | <p><i>Department of Health and well-being, Faculty of Health and well-being, Kansai University 1-11-1 kaorigaoka-cho, Sakai-ku, Sakai-shi, OSAKA 590-8515, Japan</i></p> <p><i>Department of Service Management, Faculty of Service Industries, University of Marketing and Distribution Sciences 3-1 Gakuen-Nishimachi, Nishi-ku, Kobe, Hyogo 651-2188, Japan</i></p> <p><i>Department of Health and Sports Sciences, School of Health and Sports Sciences, Mukogawa Women's University 6-46, Ikebiraki, Nishinomiya, Hyogo, 663-8558, Japan</i></p> <p><i>Research Center for Urban Health and Sports, Osaka City University 3-3-138 Sugimoto Sumiyoshi-ku, Osaka-shi, 558-8585, Japan</i></p> |
|--|--|

position. Our results suggest the importance of support from local communities and society, such as making a good relationship with surroundings, which increases the will to live, especially for individuals not living with spouses.

**キーワード**：女性高齢者，世帯構成，生きがい

**key word**：Iikigai, elderly women, household composition

## I. 緒 言

2012年度の65歳以上の高齢者人口は3074万人，総人口に占める割合は24.1%となり過去最高を更新した。特に女性は2009年度より25%を越し，2012年度は1759万人で女性人口の26.9%を占めていた。また，世帯構成については独居世帯や夫婦のみの世帯が増加しており，2030年には世帯主が65歳以上の世帯（高齢世帯という）のうち，独居世帯が約40%を占めるようになると見込まれている<sup>1</sup>。

高齢者の同居・別居にかかわる居住形態や高齢者の親子関係などについては多くの先行研究<sup>2, 3, 4</sup>がある。奥山<sup>4</sup>は独居および夫婦のみ高齢者を対象とした4年間の追跡研究で，後期高齢者が配偶者を亡くした場合，男性は子ども世帯と同居するが，女性は依然として一人暮らしをしながら独立した世帯を維持する傾向がみられると報告している。しかし，高齢者にとって家族との同居が好ましいとは限らず，物理的には孤独ではなくても，心理的には孤独な老人が意外に多いという指摘がある<sup>5</sup>。同居家族内が希薄な関係にある結果として，高齢者がうつ傾向となり，重症化から自殺に至るという例もあるという。また，夫婦制家族であっても，その延長線上にある「孤立」や「孤独」および「孤独死」の問題は払拭されない。このように高齢世帯が増え，一人暮らしの高齢者も増えていく中で，高齢者が自立した生活を可能な限り長く続けていけること，各高齢世帯ごとに充実した生活が送れることがますます重要となっている。

アメリカの老年学の権威であるバトラー（Butler, R. N.）<sup>6</sup>によって提唱されたプロダクティブ・エイジングとは生産性を保持した状態で高齢期を生きることで，高齢者に自立を求め，更に様々な生産的なものに寄与するべきであるという概念である。高齢者の活発な社会活動は「生きがい」の形成に大きく関与しており<sup>7</sup>，シルバーセンターで働くことが，

高齢者の生きがいを向上させ<sup>8</sup>，社会の一員として何らかの役割を最後まで持ち続けられることが，健康寿命を延ばすことになる<sup>9</sup>。また，前向きな精神および生きがいを持つことは，長寿と関連している<sup>10</sup>との報告がある。このように，高齢者には，身体的老化という現実を受容しつつ，精神的には自己実現を志向する積極的な生き方が必要である。国の21世紀における高齢者保健福祉施策においても，「介護サービス基盤の整備」に留まらず「健康づくりや生きがいづくり」および「社会参加」の推進を図ることが提唱されている。

本研究では，高齢世帯が増加する中，高齢者の生きがいづくりを進めるには，世帯構成ごとに生きがいの構造を検討することが必要であると考えた。特に女性高齢者においては，独居人口が男性高齢者の2倍となっており，平均寿命も長いことから，男性よりその対策が急務といえる。そこで，本研究は，60歳以上の女性高齢者を対象とし，世帯構成別に「生きがい」を規定する関連要因について明らかにすることを目的とした。

## II. 方 法

### A. 調査対象

調査対象者は，神戸市にあるR大学において実施した高齢者を対象とした健康づくり事業のイベントに参加した神戸市在住の老人クラブに所属している健康な女性であった。

調査はイベントの終了時に，質問紙を配布し，無記名式，自記式調査法によった。

分析の対象は，イベントへの参加者879名のうち，男性と調査票の回答に不備のあった445名を除外した女性434名とした。なお，調査票は参加者全員から回収した。分析対象者の年齢は60歳から87歳であり，平均年齢は70.5±5.7歳（平均±標準偏差）であった。

## B. 調査内容

質問紙の内容は、基本属性（性、年齢、世帯構成、健康状態、日常生活の状況など）、Quality of Life、タイプA行動パターン、生きがい感、孤独感、経済状況への満足感、恋の必要性、愛しい人の有無などであった。

Quality of Life<sup>11</sup>（以下、QOL）は、個々の質問項目への回答は、0点から100点の線上に自分がどのあたりに位置するかを×印で記入してもらうVisual Analog Scale<sup>12,13</sup>による方法を用いた。分析ではこれらの合計得点に0.1をかけた数値を用いた（得点範囲0-130点）。項目が環境面と身体面を問う内容に分かれているように思われたため、因子分析（主因子法、Varimax法）を行った。分析の対象は、本研究の対象者である、女性434名であった。分析の結果、2因子が抽出され、体力や健康状態などの身体的側面を問う項目と、友人・親戚関係や経済状況など環境的側面を問う項目に分かれたため、それぞれQOL「身体面」（得点範囲0-80点）とQOL「環境面」（得点範囲0-50点）として、生きがい得点との関連の分析に供した（表1）。

生きがい感は、高齢者向け生きがい感尺度<sup>14</sup>を用いた。本質問の回答の「はい」に2点、「どちらでもない」に1点、「いいえ」に0点を与え、その合

計得点を算出し（得点範囲0-32点）、生きがい得点とし分析に供した。

また、本生きがい感スケールにおける「自己実現と意欲」「生活充実感」「生きる意欲」「存在感」の4因子についても家族構成別に生きがい得点（得点範囲は、それぞれ0-12, 0-10, 0-4, 0-6）を比較した。

また、質問項目のうち、恋の必要性、愛しい人の有無については、「はい」、「どちらでもない」、「いいえ」、孤独感については、「ある」、「時々ある」、「ない」の3件法を、経済状況への満足度については、「大変満足」、「満足」、「不満」、「大変不満」の4件法を用いて尋ねた。なお、重回帰分析においては、3件法では、順に3点、2点、1点を、4件法では、4点、3点、2点、1点を与えて分析に用いた。

タイプA行動パターン（以下、タイプA）は、A型傾向判別表<sup>15</sup>を用いた。「いつもそうである」に回答がある場合に2点、「しばしばそうである」には1点、「そんなことはない」には0点を与え、そのうち3項目についてはその2倍点を与え、これらの合計点をタイプAの得点とし分析に用いた（得点範囲0-30点）。

表1 QOL尺度の因子分析結果（主因子法、Varimax回転）

	身体面	環境面	共通性
体力	.778	.114	.618
健康状態	.701	.255	.556
持続力	.673	.236	.509
バランス	.654	.228	.480
気分	.592	.409	.517
記憶力	.560	.292	.399
食欲	.500	.232	.304
睡眠	.439	.245	.253
幸福感	.344	.825	.799
生活	.282	.790	.703
経済	.273	.569	.399
友人・親戚関係	.211	.647	.464
夫婦・家族関係	.184	.671	.484
寄与率	26.414	23.454	
累積寄与率	26.414	49.868	

C. 解析方法

統計解析には、IBM-SPSS19.0Jを使用した。データの解析は、家族構成を配偶者の有無別に分け、さらに配偶者ありでは、「夫婦のみの世帯」（以下、夫婦群）と「配偶者および配偶者以外の同居家族あり」（以下、配偶者あり同居群）、配偶者なしでは、「独居」（以下、独居群）と「配偶者がなしで他の家族と同居」（以下、配偶者なし同居群）の4群とし、これらの群間で比較検討を行った。各群の人数と平均年齢±標準偏差は、夫婦群216名（69.6±5.2歳）配偶者あり同居群85名（68.4±5.3歳）、独居群63名（73.2±5.5歳）、配偶者なし同居群70名（73.0±6.1歳）であった。

生きがい得点の家族構成の4群間の比較においては、年齢を共変量とした共分散分析を行い、多重比較検定（Bonferroni法）を行った。

また、生きがいに影響を及ぼす要因について検討するため、生きがい得点を従属変数、年齢、恋の必要性、愛しい人の有無、孤独感の有無、タイプA、QOL「身体面」、QOL「環境面」、経済状況を独立変数として家族構成別に、ステップワイズ法による重回帰分析を行い、生きがい得点に関連する要因の抽出を行った。なお、年齢は、調整変数として強制投入した。

さらに、生きがいと人間関係における満足感との関係をみるため、生きがい得点とQOLの質問項目である家族関係を尋ねた項目、友人・親戚関係を尋ねた項目との相関分析を行った。

D. 倫理的配慮

調査対象者に対し本調査時に研究目的、方法、参加の自由意思、プライバシーの保護、目的外の使用の禁止などについて説明し理解を得た後、自発的な意思により同意した者に参加をしてもらった。

Ⅲ. 結 果

A. 世帯構成別にみた生きがい得点と生きがい感の4因子

生きがい得点と生きがいの4因子ごとに世帯構成間で違いがあるかをみるために、年齢を共変量とした共分散分析を行った。その結果は、表2の通りである。生きがい得点で有意差（ $F(3, 429) = 3.33, p < 0.05$ ）が認められたため、下位検定（Bonferroni法）を行った。その結果、夫婦群が配偶者なし同居群よりも有意（ $p < 0.05$ ）に高値を示した。そして、生きがいの4因子では、「生きる意欲」（ $F(3, 429) = 4.23, p < 0.01$ ）と「存在感」（ $F(3, 429) = 6.93, p < 0.001$ ）で有意差が認められた。下位検定の結果、「生きる意欲」では、夫婦群が独居群よりも有意（ $p < 0.01$ ）に高値を示し、「存在感」では、夫婦群が独居群（ $p < 0.001$ ）と配偶者なしの同居群（ $p < 0.01$ ）よりも有意に高値を示した。

B. 世帯構成別にみた恋の必要性、愛しい人の有無、孤独感の有無、経済状況の満足度

世帯構成別にみた、恋の必要性、愛しい人の有無、孤独感の有無、経済状況の満足度を示したのが表3である。恋の必要性については、4群間に有意に近

表2 生きがい得点と生きがいの4因子の世帯構成間比較

		配偶者あり		配偶者なし		F値	共分散分析結果
		夫婦群	同居群	独居群	同居群		多重比較 (Bonferroni法)
	N	216	85	63	70		
生きがい (合計得点)	平均 標準偏差	26.66 4.25	25.48 4.66	25.63 4.85	25.06 5.80	3.33*	配偶者なし同居群<夫婦群*
自己実現と意欲	平均 標準偏差	9.73 1.99	9.34 2.11	9.86 2.06	9.04 2.93	2.47	
生活充実感	平均 標準偏差	8.30 1.85	7.79 2.00	8.29 1.83	8.10 2.25	1.35	
生きる意欲	平均 標準偏差	3.48 0.80	3.39 0.90	3.06 1.19	3.31 0.97	4.20**	独居群<夫婦群**
存在感	平均 標準偏差	5.15 1.14	4.96 1.27	4.43 1.54	4.60 1.54	6.93***	独居群***<夫婦群 配偶者なし同居群**<夫婦群

\*\*\*p<0.001, \*\*p<0.01, \*p<0.05



い差がみられ、夫婦群において「必要」とする者が高い傾向にあった ( $p<0.10$ )。愛しい人の有無については、「いる」と回答した者は、配偶者あり同居群が77.6% (調整済み残差 (以下、 $r$ とする)  $r=2.9$ ) で、独居群と配偶者なし同居群のそれぞれ46.0% ( $r=-3.2$ )、47.1% ( $r=-3.2$ ) と比べ有意に高値を示した ( $p<0.001$ )。孤独感では、孤独感が「ある」と回答したのは、独居群が61.9% ( $r=3.8$ ) で最も多く、夫婦群では33.8% ( $r=-2.8$ ) と低かった ( $p<0.001$ )。経済状況の満足度では、夫婦群が84.7% ( $r=3.5$ ) と最も高かった ( $p<0.01$ )。

### C. 世帯構成別にみた生きがい関連要因

生きがいに影響を及ぼす要因をみるために、生きがい得点を従属変数とし、年齢、恋の必要性、愛しい人の有無、孤独感、タイプA、QOL「身体面」、QOL「環境面」と経済状況を独立変数として、世

帯構成別に重回帰分析 (ステップワイズ法) を行った。対象者の年齢は調整変数として強制投入した。なお、変数間の相関行列をもとに、疑似相関について検討したが、その存在は認められなかった。また、多重共線性についてはVIFを算出し、多重共線性が疑われるものがないことを確認した。分析の結果は、表4の通りである。

夫婦群では、孤独感、QOL「身体面」、愛しい人の順で、配偶者ありの同居群では、QOL「身体面」、経済状況、孤独感の順で、独居群では、QOL「環境面」、QOL「身体面」、恋の必要性の順で、配偶者なしの同居群では、QOL「身体面」、恋の必要性の順で、生きがいに影響を与えていることが分かった。

生きがい感への影響力に違いはあるものの、全ての群で、QOL「身体面」は、生きがい感に影響を与えていた。そして、配偶者ありの夫婦群と同居群

表3 恋の必要性、愛しい人の有無、孤独感の有無と経済状況の満足度の世帯構成間比較

		配偶者あり				配偶者なし				$\chi^2$ 検定
		夫婦群		同居群		独居群		同居群		
		N	%	N	%	N	%	N	%	
恋の必要性	必要	124	57.4	40	47.1	25	39.7	33	47.1	p<0.10
	不要	92	42.6	45	52.9	38	60.3	37	52.9	
愛しい人の有無	いる	150	69.4	66	77.6	29	46.0	33	47.1	p<0.001
	いない	66	30.6	19	22.4	34	54.0	37	52.9	
孤独感の有無	ある	73	33.8	33	38.8	39	61.9	30	42.9	p<0.001
	ない	143	66.2	52	61.2	24	38.1	40	57.1	
経済状況の満足度	満足	183	84.7	59	69.4	46	73.0	49	70.0	p<0.01
	不満	33	15.3	26	30.6	17	27.0	21	30.0	

注：恋の必要性の「不要」には「どちらでもない」の回答を含む  
 愛しい人の「いない」には「どちらでもない」の回答を含む  
 孤独感の「ない」には「時々ある」の回答を含む  
 経済状況の「満足」には「大変満足」の回答を含む、「不満」には「大変不満」の回答を含む

表4 世帯構成別の生きがい関連要因 (重回帰分析, ステップワイズ法)

		配偶者あり		配偶者なし		
		夫婦群	同居群	独居群	同居群	
		N	N	N	N	
独立変数		$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	
	孤独感	-.312***	QOL「身体面」	.308***	QOL「環境面」	.428***
	QOL「身体面」	.278***	経済状況	.288**	QOL「身体面」	.336**
	愛しい人	.234***	孤独感	-.228*	恋の必要性	.237**
R <sup>2</sup>		.304	.383	.567	.511	
調整済みR <sup>2</sup>		.291	.352	.537	.489	

\*\*\* $p<0.001$ , \*\* $p<0.01$ , \* $p<0.05$

では、孤独感の低さが生きがい感を高める要因として共通していた。また、配偶者なしの独居群と同居群では、恋の必要性を感じていることが生きがい感を高める要因として共通していた。

#### D. 生きがい得点と人間関係における満足度との関係

生きがいと人間関係における満足感の関連を見るために、QOL項目の中で、家族関係を尋ねた「夫婦や家族、子供、孫との関係はうまくいっていますか」と、友人・親戚関係を尋ねた「友人や親戚との人間関係には満足していますか」の2項目と生きがい得点の相関係数を算出した。その結果、家族関係の満足度では、独居群 ( $r=0.44$ ,  $P<0.001$ ), 配偶者なしの同居群 ( $r=0.44$ ,  $P<0.001$ ) でやや高い相関が認められた。また、友人・親戚関係の満足度では、独居群 ( $r=0.55$ ,  $P<0.001$ ) でのみやや高い相関が認められた。

### IV. 考 察

本研究は、60歳以上の女性高齢者を対象とし世帯構成を「夫婦」「配偶者あり同居」「独居」「配偶者なし同居」の4つの群に分け、「生きがい」を規定する要因について検討した。

#### A. 世帯構成別にみた「生きがい得点」

世帯構成間で生きがいを比較した結果、夫婦群は独居群よりも生きる意欲を強く感じ、また夫婦群は独居群と配偶者なし同居群よりも存在感を強く感じていることが明らかとなった。このような結果が得られた明確な理由は不明だが、同居をしていない夫婦二人きりの環境では、夫の存在が、女性高齢者にとって、自身の生きる意欲を高めたり、存在感を強く感じられるような要因となっている可能性が考えられる。多くの場合、女性が夫のために家事一般をすると考えられるため、二人きりだと、自分が夫のために家事をやらなくてはという意欲や夫のために家事をする自分の存在を感じる機会が多いのではないかと推測した。

#### B. 世帯構成別にみた恋の必要性、愛しい人の有無、孤独感、経済状況の満足度

愛しい人の有無、孤独感の有無の回答率について

は、配偶者の有無で回答が二分していることが明らかとなった。配偶者ありの2群は、愛しい人が「いる」、孤独感が「ない」と回答した者が多かった。このような結果になったのは、配偶者のいる環境では、身近にパートナーがいるといった安心感から、愛しい人がいると感じ易く、また孤独感を感じずにいられるのではないかと考えた。一方、配偶者なしの2群は、愛しい人が「いない」、孤独感が「ある」と回答した者が多かった。特に独居は4群の中で61.9%と最も多く孤独感を抱いていた。しかし、同じように配偶者がいない環境であっても、同居している家族の有無で孤独感の大きさが違うことが分かった。それは、独居群の物理的孤独が孤独感を感じ易くさせている可能性が考えられた。孤独感について、先行研究<sup>3,5</sup>では、配偶者なしで同居生活を送る環境においては、家族からの情緒的サポートを得られない場合に孤独を感じることや、独居においては、「知人・友人や近所の人と交流があるだけでは社会的孤立を否定できない」と述べている。本研究においても、これらの知見と同様の傾向が窺えた。

経済状況については、夫婦群で満足している者が多いことが分かった。同じ配偶者ありでも、同居群では、満足と回答した者が夫婦群と比較してかなり少なく、回答に大きな違いが見られた。その理由として、同居家族がいる場合は、夫婦二人だけの生活費や娯楽費だけでは済まず、同居家族に対する出費が生じる機会も増えてくると考えられるため、同居家族への出費が経済状況への満足度に影響する要因の一つとして含まれる可能性が考えられる。

#### C. 世帯構成別にみた生きがい関連要因

女性高齢者の生きがいを高めるのは、健康であることが共通の必須条件(QOL「身体面」)として確認できたが、その他の要因については、対象者の世帯構成ごとで特徴がみられることが明らかとなった。配偶者あり群では、2群揃って、孤独感の低さが生きがいの向上に関連していた。これは、恋心とは表現できない長年連れ添った「夫婦の絆」という、情緒的な「安心感」を意味していると推測した。一方、配偶者なしの2群では、孤独感があると回答した者が多かったが、2群とも孤独感が生きがいに影響を与える要因にはならないことが示唆された。先行研究<sup>3</sup>では、独居の場合「近所付き合いがない」「引

きこもりがち」と本人は感じているが、実際には外出の頻度や人と接する機会が他の群より多いことが指摘されており、本研究の結果においても同様のことが考えられた。しかし、この孤独感は「孤独不安」であり、今後「社会的孤立」へと進む危険性が考えられる。したがって、「配偶者なし」の2群には、「社会的孤立」が生じる前からソーシャルサポートが必要である。「独居」には、近所や友人の、そして、「同居」には同居家族からの情緒的なサポートが、生きがいを更に向上させることに繋がると推測できる。

恋の必要性は、生きがいを高める要因として、配偶者の有無により異なる関連性を示した。配偶者あり2群では、恋の必要性和生きがいとの関連はみられなかったが、配偶者なし2群では、恋の必要性の高さが生きがいの向上と関連していた。しかし配偶者なし2群は、恋の必要性については「不要」と回答する傾向にあったが、ここで「必要」と回答した者ほど生きがい度が高くなることが明らかとなった。

#### D. 生きがい得点と人間関係における満足度との関係

生きがいと人間関係の満足度の関連について、配偶者なしの2群では、家族関係がうまくいっていると生きがいが高く、独居群では、友人や親戚関係で満足度が高いと生きがいが高いことが分かった。このことから、独居群は配偶者ありの2群と比べて、他者と接触する機会が多く、つまり、対人関係を構築したり、維持していくような意識が高い可能性が考えられる。

以上のことより、女性高齢者において、世帯構成の違いで生きがい感を高める要因が異なることが明らかとなった。

超高齢社会を迎えた我が国で、高齢者の自立の維持や生きがいの保持を可能とするには、高齢者自身、孤独を感じない生活環境づくりや、恋を必要に思えるような前向きな気持ちを持つことも必要であるが、地域での介護や見守りのニーズを行政が把握すると共に、地域住民を巻き込んだソーシャルサポート体制の充実が今後更に重要になると予測される。

今回の調査は、老人クラブの所属する健常な高齢者を対象としていることから、集団としての特性

が、一般高齢者と比較して、生きがい感や孤独感等において相違する可能性があること、また、断面調査であることなど、調査の限界があり、今後は対象を広げ、より詳細な調査によって明らかにしていく必要があると考える。

#### 引用文献

- 1 国立社会保障・人口問題研究所。『日本の世帯数の将来推計（全国推計）』（2013（平成25）年1月推計）、<http://www.ipss.go.jp>。
- 2 安達正嗣。高齢期家族の社会学。世界思想社、京都府、1999。
- 3 石塚 優。高齢者の世帯構成による社会関係の比較—ひとり暮らし高齢者に着目して。都市政策研究所紀要、(5)、53-73、2011。
- 4 奥山正司。大都市における高齢者の家族変動をめぐって。老年社会科学、34(1)、57-63、2012。
- 5 島田京子、山崎幸子、中野 匡子、ほか。同居家族からのソーシャル・サポートが高齢者のうつ傾向発生に与える影響：5年後の追跡調査。老年社会科学、34(3)、350-359、2012。
- 6 Butler RN, The study of productive aging, J Gerontol B Psychol Sci Soc Sci., Nov, 57(6), S323, 2002.
- 7 松田晋哉、筒井由香、高島洋子。地域高齢者のいきがい形成に関連する要因の重要度の分析。日本公衆衛生雑誌、42(2)、704-712、1998。
- 8 Shirai K, Iso H, Fukuda H, et al. Factors associated with "Ikigai" among members of a public temporary employment agency for seniors (Silver Human Resources Centre) in Japan; gender differences. Health Qual Life Outcomes. 4 (12), 12-17, 2006..
- 9 原田隆、加藤恵子、小田良子、ほか。高齢者の生活習慣に関する調査(2)—余暇活動と生きがい感について。名古屋文理大学紀要、11、27-33、2011。
- 10 Tanno K, Sakata K, Ohsawa M, et al. Associations of ikigai as a positive psychological factor with all-cause mortality and cause-specific mortality among middle-aged and elderly Japanese people: findings from the Japan Collaborative Cohort Study. J Psychosom Res. 67(1), 67-75, 2009.
- 11 松林公蔵、和田知子、木村茂昭、ほか。老年者の包括的健康度に関する地域比較研究（高知・屋久島）Ⅴ—情緒ならびにQuality of Life (QOL) —。日本老年医学会雑誌、31、(10)、790-799 1994。
- 12 松林公蔵、木村茂昭、岩崎智子、ほか。“Visual Analog Scale”による老年者の「主観的幸福度」の客観的評価：Ⅰ—標準的うつ尺度との関連—。日本老年医学会雑誌、29、(11)、811-816 1992。

- 13 松林公蔵, 小澤利男, 老年者の情緒に関する評価。  
Geriatric Medicine, 32, 541-546, 1994.
- 14 近藤 勉, 鎌田次郎, 高齢者向け生きがい感スケール (K-I 式) の作成および生きがい感の定義. 社会福祉学, 43(2), 93-101, 2003.
- 15 前田聰 行動パターン評価のための簡易質問紙法「A 型傾向判別表」, タイプ A, 2, 33-40, 1991.